

中国フイーバーへの戒め

開放経済も「中体西用」が基本

中嶋嶺雄

東京外語大教授

「このごろ、中国の「開放」経済に刺激されて、わが国経済界には大変な中国フイーバーが生じている。永いあいだ「貧困のユートピア」を求めて果たさず、そのために混乱と疲弊を繰り返してきた中国であつてみれば、当面の対外「開放」政策と経済活性化政策によつて中国社会が急激に勢いついてきているのは、当然の成り行きであらう。こうした変化に対応して、わが国が応分の協力をする」と自体に異を唱えるつもりはないが、わが国と中国との一人当たりGNPは、四十対一というほどに大きく開いているのであるから、わが国の経済力が中国社会全体に与える影響は絶大であり、それだけにわが国の側こそ、それなりの節度や配慮が要請されねばなるまい。

「異母兄弟としての日中関係」の歴史の教訓を考えれば、「この」とは明白であらうが、当面、いくらカラーTVその他の電気製品が売れるからといって、「それゆけ中国」とばかり、中国市場を求めて突っ走るとしたら、やがてその反動は大きくなるであらう。

中国市場を十億のマーケットと見なせば、巨大ではあるけれど、わが国の一部の企業家の、夢を仄聞するにつけ、かつてアヘン戦争前後にイギリス人が描いた、幻想と重なり合うように私には思われてならない。

当時、産業革命によるブームが一巡して不況に悩んだランカシャーの紡織業者たちは、巨大な中国市場に目が眩み、「中国人の種る布襟児（木綿の上衣）の袖が二丈でも伸びれば、その頭数に勘案して、ランカシャーは永遠に栄えるだろう」と思い込んで失敗した。そこでイギリス人は中国へのアヘン売り込みに走っていったのである。しかも、アヘン戦争で領有した香港の初代総督になったヘンリー・ポッターマンジャーは、「ランカシャーの全工場をもつてして、中国の二省に十分供給できるだけの靴下の材料を製造できない」と中国市場の大きさを幻惑させ、はしゃぎまわっていたのである。

だが、中国人は、このよつな市場としていつまでも甘んじている



3月7日

ほど卑屈な民族ではなかった。そして中国の近代化に際して「中体西用」という言葉があったように、今日でも基本はあくまでも中国なのであって「西」つまり欧米先進国や日本の進んだ技術や製品は「用いる」対象でしかないことを忘れてはなるまい。

最近の中国が、春の訪れに浮かれた「花見酒の経済」よろしく活気づいたまま、西側、とくに日本から商品や技術を導入しつづけたとしたら、その結果がどのような事態になるかは、中国人自身が当然知っているはずである。

中国はこのところ、合弁企業の土地建物の不当に高い評価はもとより、北京の外国企業オフィスなどの異常に高い賃料、外国人への二重価格制、また高料金による観光収入、さらには農産物の一種の飢餓輸出、までおこなって外貨獲得に全力を投入し、現在、百数十億米の外貨を保有するにいたったが、十億の人口を擁する国家としては、この程度の外貨で外債を重ねてゆけば、いつまた危殆ラインに陥るかも知れないのが実情である。

しかも、「四つの現代化」は一種の「富国強兵」政策でもあるので、マイクロエレクトロニクスなどのハイテク製品や各種先端技術の導入にきわめて熱心である半面、近代化のためのインフラ・ストラクチャーの充実は、そう簡単ではないから、この点でのひずみも出ていよう。

マックス・ウェーバーの言葉を借りるまでもなく、中国民族に伝統的な欲望と勘定高さも相まって、「開放」政策とともに、現行の経済水準に不相応な消費性向や、拝金主義、が生まれつつあり、そうした風潮による犯罪も激増している。わが国経済界の「中国熱」

がそのような風潮を助長しかねないことについても、十分注意すべきであろう。

それだけに中国内部には、現在、「開放」政策の行き過ぎへの抑制傾向も始めている。こうした方向は、経済の基調を無視した拡大路線への一種の批判となって自立立ちつつあり、非毛沢東化と「四つの現代化」では一致しているリーダーたちのあいだでも、陳雲、姚依林、薄一波、蘇養橋らの経済の指導者や李先念、彭真、胡喬木、鄧力群らの行政および党の指導者の最近の諸発言に、それを見てとることができる。とくに、前者のリーダーたちは、去る十二月のアルヒボフ・ソ連第一副首相訪中による中ソ関係の大幅な改善を中国側で受けとめたリーダーたちであることも注目せねばならぬ。

しかも、わが国は、七〇年代初頭の日中国交樹立時の第一次中国フィーバー、七〇年代末の日中長期貿易取り決めや日中平和友好条約締結時の第二次中国フィーバー、そして今回の「開放」政策に伴う第三次フィーバーを通じて、日中関係の形成にかなする大きなコストも支払っている。

それはたとえば、本来、中国自身の内政問題である台湾問題にかなして、アメリカのマスメディアや企業、銀行などは台北にも北京にも双方に支局や支店をもっているのに、わが国はそれが出来ないという代償となつてはね返ってきているのだ。

「中国熱」も結構ではあるが、なぜ鳴り物入りの宝山製鉄所が、いまだに一塊の鉄を生産できないのかを、日中双方が冷静に「等閑」しあうべきでないか、さしあたっての必要ではなかつたか。